

奥山おくやまに猫ねこまたといふものありて

(口語訳)

「人里はな離れた山に『猫また』というものがいて、人々を食うそつだ。」

と、(ある) 人が言ったところ、「山ではないけれども、このあたりに、猫が年を経て変化して、猫またになって、人を捕とらえることがあるということなのに。」

と言う者がいたのを、なんとか阿弥あみ陀だ仏ぶつとかいう、連歌れんがを仕事のようにしていた法師ほうしで、行願寺ぎょうがんのほとりに住んでいた法師が聞いて、一人歩きをする自分は用心しなければならぬことと想っていたちようどその頃ころ、ある所で夜が更ふけるまで連歌して、ただ一人で帰った時に、小川こがわのほとりで、うわさに聞いた猫またが、狙ねらいどおり足もとへすつと寄って来て、いきなり飛びつくやいなや、首のあたりをかみつこうとする。(その法師は) 正気も失ったために、防ごうごうするけれども、力も(抜けて) なく、足も立たず、小川へ転げ込んで、

「助けてくれ。猫まただ。おういおうい。」

と叫さけぶと、家々から、(人々が) いくつものたいまつを灯ともして走り寄って見ると、このあたりで見知みちっている僧そう(法師) である。

「これはどうしたことだ。」

と言って、川の中から抱だき起こしたところ、(その法師は) 連歌で賞品を取って、(その賞品の) 扇あふぎや小箱などを懐ふところに持っていたのも、水の中に入ってしまった。かろうじて助かった様子で、這はうようにして家の中に入ってしまった。

(実は、その法師の) 飼っていた犬が、暗いけれど主人とわかって、飛びついたところである。

【参考】

ある人、弓射ることを習ふに

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて、的に向かふ。師の言はく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。毎度、ただ、得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」と言ふ。

わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師、これを知る。この戒め、万事にわたるべし。【第九二段】

(口語訳)

ある人が、弓を射ることを習うのに、二本の矢を手にはさんで持って、的に向かった。(弓の) 師匠が言うには、「習いはじめの人は、二本の矢を持てはいけない。二本めの矢をあてにして、最初の矢にいいかげんな気持ちが出る。いつも、ただあたりはずれに心を奪われることなく、この一本で決めようと思え。」と言う。

わずかに二本の矢である、師匠の前でその一本をいいかげんにしようと思うだろうか(思いはしないだろう)。なまけ心というものは、自分では気づかなくても、師匠は、これをよくわかつている。この訓戒は、万事に通用するだろう。